

五回目をむかえた彗星会議

長谷川 一郎*

明るい彗星の新発見では、最近の我国のコメット・ハンター達の活躍は目ざましいものがある。第二次大戦前は、散発的にしか新発見は行われていなかった我国で、戦争直後から近年にいたる本田実氏のコメット・ハントは、彗星界での記録的な業績であった。この本田氏の伝統をひきついで、1961年から、関勉、池谷薫両氏の活躍期に入り、1965年のイケヤ・セキ大彗星の出現で、最盛期に突入した感があった。その後、第二のセキ、第二のイケヤを目ざすコメット・ハンターが続出し、1968年から1971年にかけて、眼視による新彗星の発見における我国のコメット・ハンターの活躍は最高潮に達したのである。そして全国各地に彗星搜索を試みる人々が続出し、東京天文台をはじめ、各地の天文同好会や、コメット・ハントの先輩達のところには連日のように彗星発見の真偽とりまぜての電話や電報が殺到するようになった。また有力なアマチュア達は、口径30センチ、40センチの望遠鏡を設備し、微光彗星の写真観測を実施するようになった。その結果小島信久氏の2つの写真彗星の発見や、つい最近のウエスト・コホウテク・池村彗星の池村俊彦氏のような人が現われるようになったのである。また電子計算機が使用できる人々は、当然のことながら彗星の軌道計算や摂動計算を、なかば手さぐりの状態で、計算し始めるようになったのである。

このような背景もあって、各地の熱心な彗星観測者と、東京天文台や、その他の彗星に関心を持っている研究者たち、いわばプロとアマの交流を深め、情報の交換を促進するために、どこか適当な場所で集まろうではないかと誰からともなくいい出して、取敢えず関、小島両氏と筆者が呼びかけた形をとって集ったのが、1971年4月に蒲郡（日本のほぼ中央に位置する）で開かれた「彗星会議」であった。その後、結果的に毎年、開かれることになって、今年で既に5回目をむかえることになるとは、はじめは誰も予想していなかったのではないかと思われる。第1回から第5回までの会議の概略は次の通りである。

- 第1回 1971年4月3日—4日 愛知県蒲郡市
出席者 55名
- 第2回 1972年3月26日—27日 高知市桂浜
出席者約 50名

- 第3回 1973年3月24日—25日 静岡県
出席者約 100名
- 第4回 1974年3月24日 東京都
出席者約 120名 (25日に堂平観測所見学)
- 第5回 1975年3月29日—20日 愛知県東栄町
御園天文科学センター 出席者約 110名
- 第6回 1976年 仙台で開かれる予定
- 彗星会議は、参加者全員が同等の立場で話合うことをその基本方針としている。第1回の時、広瀬秀雄氏は出席できなかったのも、手紙で次のような主旨を述べた。「出席者の中には特権階級はないという基本の線で合議進行をはかっていたらいいと思います。但し各人に知識、経験の差があることは確かです。会議によって急速にこの知識と経験をわかち合うこと、これが会議の一つの目標でなければなりません」この精神は第1回から第5回までその通り、つら抜かれて来たと思うし、また今後もこの方針は変わらないと思う。

第1回の会議は、初めてのことであったので、顔合せと、かなり具体的な彗星観測法の意見の交換に終始した。国際天文電報中央局のマースデンもメッセージを送って来て、とくに、発見通報を敏速にすることと、その確認のためのネットワークを確立するようにとの要望があった。この点については、我国では東京天文台天体掃索部を中心にして、比較的よく実行されていると思われる。この会議は、これを一層、スムーズに、またさらに強化することを一つの主題としているのもであった。この会議を一つの契機として、その後東亜天文学会彗星課では、関勉氏らの尽力のもとにコメット・ブレイティンを創刊し、既に100号が発行され、毎号約330部が配布されている。第1回の会議には、故神田茂氏や清水真一氏ら、彗星観測の大先輩も顔を見せ、平均年齢20歳前後の若いコメットハンターにとっては、半ば歴史的存在を目の前にしてよい刺激となったと思われる。神田氏は第3、第4回にも出席された。広瀬氏も第3回には自ら出席し、短周期彗星の成因に関する解説をされた。また本田実氏も（ご本人には、失礼かも知れないが）若い新進にとっては既に「神格」的存在である。同氏は第4回以降出席されているが、その他、自分では歴史的存在と思っておられる人も、今後、どんどん出席されて、若い人に良きはげましをいただきたいと、誌上をかりておねがいする次第である。

第2回は、少し遅かったが、関勉氏のお骨折りによっ

* I. Hasegawa: Japanese Comet Conferences, 1971-1975.

て高知で開かれた。この会議では、第1回同様、討論討論が行われたが、大体の問題点は前回に出たばかりで、しかも直ちにどうこうしなければならない問題もなかったようで、この時は、いわゆる経験者のお話を承る勉強会のような雰囲気であった。

第3回と第4回は、開催地が交通便利な所でもあり、前2回のこの会議のうわさ（必ずしも成果ではない）を聞きつけて、100名を超す出席を見た、どちらかというところ、これから自分も彗星観測や、軌道計算などに乗り出そうという元気一杯の人々が多かったようであった。今年の第5回も、そうであったが、かなり意見や要望が出て、今後これをどうまとめて行くかが大きな課題になるように思われる。第3回では不満や異見も多かったようであるが、第5回はかなり積極的な意見交換が行われた。特に彗星光度の観測法の確立、写真観測や物理観測への意欲などが強く表明されていたと思う。

第4回では、討論というより、研究発表が講演にかなりの時間をさくこととなった。故神田茂氏は、周期彗星の同定や、李朝の彗星古記録の調査について述べられたことが印象的であった。その他冷却カメラによる写真撮影や、フィルムを使用した位置観測の精度、光学ガラスについてなど有益な話題が多かった。加えて、翌日は東京天文台のご好意で堂平観測所を見学したことは有意義

であった。

この会議には、彗星を観測しているプロ・アマの殆どの人々が出席している。他の諸研究会にはあまり見られない、珍しい、特異な会合であるといえよう。一つには彗星のもつ本来の特殊性があるのかも知れない。明るい新彗星は、古今東西にわたって殆どアマチュアが見つけて来ている歴史的事実もあろう。しかし、単なるコメット・ハントだけでなく、常時、彗星をパトロールすることは学問的な立場からも重要なことであり、またアマチュアも充分この任にたえることが出来るのである。彗星の多くの分野に於いて、プロ・アマの協力が大切でありまた可能であろう。

今までのところ、彗星の物理や起源に興味をもっている、理論家の出席が少なかった。今後は、これらの人々の参加を特に歓迎したいと思う。

この彗星会議の主催母体は、今のところまだ存在しない。第5回から数人の運営委員が中心となって開催されることとなった。やっと、これから本格的な運営や活動が進められるようになったのである。今後とも多くの人々のご協力とご援助をおねがいをしたいと思う。また、会議の開催を引き受けていただいた開催地の人々には、毎年多大のお骨折りをわざわざ来て。これらの方々に厚くお礼申し上げたい。

第5回会議の記念写真

